博 士 論 文 要 約

村上春樹作品考

―身体観を中心に―

A Study of Haruki Murakami's Works:

With a Focus on Bodily Experience and Sensuous Perception

国際基督教大学　大学院
アーツ・サイエンス研究科

Presented to
International Christian University
Graduate School of Arts and Sciences

２０２３年１２月６日
December 6, 2023

周　鈺
ZHOU, Yu

序章

序章では、村上作品の先行研究から幾つかの凝縮された観点を選び出し、重要な理論的な土台となる読者論を提起し、問題提起を行った。従来の作家論や作品論にリンクする一方、読者論は作品解読における読者の役割を重要視するという独自性を持っている。そこで受容過程における読者の役割を積極的に評価する〈開かれた作品〉の理論を紹介したうえで論述を進め、そこで村上作品の文体に対する「翻訳調」「英語的」という評価の重複性を見出し、日本語で執筆した作品の文体への再認識を行う必要性を意識した。日本語の漢字、仮名、ローマ字を併用する表記の特徴及び曖昧さに富む表現が、表記というレベルでの特徴づけに可能性を与えている。また作品の文体において「通感」、リズム感等の評価は身体との関連性を際立たせている。そこで身体に関する諸論説を振り返ったうえで、表現のレベルにおいて作品の特徴の再考を行うことを決めた。さらにもう一つ、内容のレベルでは頻繁に議論されている性描写はその良否を問わず、村上作品の顕著な一特徴として位置付けられている。こういった現状に即して、エロティシズム論に合わせながら直接的な性行為並びに間接的な性的雰囲気を醸成する性的描写を分析することにした。この一連の考察を通して、村上作品の特徴を再発見することを目的とする。

本論文は序章と終章のほか、五章からなる。「第一章　中国語訳が喚び起こした村上ブーム」「第二章　村上春樹作品の「開かれた」構造」「第三章　感覚の世界としての村上春樹文学」「第四章　『ノルウェイの森』のエロティシズム」「第五章　『騎士団長殺し』のセクシュアリティ」という構成で考察を進める。

第一章　中国語訳が喚び起こした村上ブーム

第一章においては、数多くの読者に読まれている村上作品の「開かれた」構造を裏付ける受容の様子を概観しながら、殊に中国大陸、台湾において作品がどのように受け止められているのか、村上文学の社会的な意義も含めてその具体像のまとめを行った。

第一節　中国大陸における村上春樹文学の受容

本節では中国大陸における村上春樹文学の受容の具体像を翻訳・出版事情、社会的意義、研究などの側面に分けて紹介する。

藤井省三の研究によると、はじめて中国大陸に村上を紹介したのは 1986 年 2 月刊行の中国の『日本文学』である。中国大陸における村上受容に大きな影響を与えたのは、村上の代表作の一つ『ノルウェイの森』の中国語訳の出版である。王海藍のアンケート調査によると、中国の「村上春樹熱」は実は『ノルウェイの森』のブームであったという。大ベストセラーである『ノルウェイの森』は中国語圏において複数の中国語訳が刊行され、大勢の読者を獲得した。

翻訳出版が相次ぐ中で、中国語簡体字版・林少華訳と中国語繁体字版・頼明珠訳の翻訳をめぐる「林頼の争い」と呼ばれる文芸論争が勃発した。「林頼の争い」とは主に二人の訳文の比較研究を行った学者による訳文の優劣をめぐる激しい論争を指すのである。

多様性に富む村上作品の受容の具体像における注目すべきもう一つの出来事は長く続いた村上作品の中国語簡体字版をめぐる版権争いである。2009 年、『走ることについて語るときに僕の語ること』（2007、文藝春秋）の中国語訳が、長い間村上作品の簡体字訳の版権を持っていた上海訳文出版社ではなく、南海出版社から刊行された。更にはそれに加えて長編小説『1Q84』の版権争いも一時的に話題となった。そのような猛烈な勢いの出版事情を踏まえながら、経済的、社会的背景をもとに、村上作品が社会的な意味や価値を賦与されるようになり、「小資」という表現の流行とともに若者をはじめとする読者に多大な影響を与える一種の文化的シンボルとなった。

そして村上作品から影響を受けて作家として文学創作に取り組む「村上チルドレン」という概念も村上作品の影響力を裏付けている。研究者の場合では、翻訳比較、作品のモチーフ、社会的問題への注目など異なる側面から研究活動が盛んに行われている。

第二節　台湾における村上春樹受容

本節では台湾における村上春樹受容の様子について同じように翻訳・出版事情、社会的意義、研究などの側面にわけてそれぞれの情報をまとめる。

台湾における村上受容に不可欠な役割を果たしているのが中国語翻訳者の賴明珠であることはしばしば指摘されている。故郷出版社から 1989 年刊行された、劉惠禎・黄琪玟・傅伯寧・黄翠娥・黄鈞浩という五人の翻訳者のグループによる『ノルウェイの森』の中国語訳は人気を得て台湾では村上春樹現象を出現させたと言われている。

台湾においても村上作品の翻訳、出版により、読者が熱狂的なファンとして育てられている。台湾の街を歩き回ると、「挪威森林　珈琲館（ノルウェイの森　珈琲館）」、「海邊的卡夫卡　珈琲館（海辺のカフカ　珈琲館）」を見かけることができる。

村上作品が多くの読者に愛読されるだけでなく、文化的象徴にもなっている。中国大陸の「絶対村上（ばっちり村上）」に対応するように、台湾では「非常村上（すごく村上）」という流行語まで生まれた。それは村上の社会的意義を表している。「文青」「小確幸」などの流行語に伴い、村上文学が若者の煩悩や失望を慰めたり、癒したりする存在となった。殊に村上による造語である「小確幸」を当時の台湾の社会状況に合わせると、ポジティブ、またネガティブな捉え方が両方とも可能であるという台湾での受容の様子は村上作品の読みの多様性を見せている。

この時期、台湾の読者だけでなく、村上を読まない人にとっても村上及び作品は単なる作家、文学作品だけではなくなり、文化的象徴として日常生活のあらゆる側面にまで浸透していたと結論付けられる。無論のこと、台湾においても異なる視点から研究活動が活発に行われている

第三節　表紙が語る受容の変遷

本節においては村上作品の盛んな翻訳・出版事情の一側面を成す装丁や表紙デザインの変化に着目し、なかでも『ノルウェイの森』を代表例にし、同一作品の中国語訳の異なる表紙を詳しくみていきたい。

『ノルウェイの森』の異なる中国語訳の表紙がそれぞれの小説に対する異なる読みによって複数作られたことが明かである。同じ出版社は異なる時期に違う表紙を作ることは、同じ作品

に対する理解も時代とともに変わっていくことを示している。『ノルウェイの森』の新しい中国語訳が出版されるごとに作られた表紙のデザインに現れた相違は、読者としての編集者、出版社側の作品内容に対する捉え方の変化を示していることが分かる。表紙を通して一般読者に伝えられるメッセージによって築かれる期待や先入観における差異なども容易に想像が付く。読者は村上作品への視線を最初の若い男女の恋話や情事から、だんだん作品自体の文学性に注ぐようになってきたのである。そのような変遷もまた村上作品の「開かれた」構造を証明しているといえよう。

第二章　村上春樹作品の「開かれた」構造

本章では、第一章の「開かれた」構造の具体的な結果としての受容の様相を踏まえ、〈開かれた作品〉の紹介を試みた。

第一節　「開かれた」テクストの理論

本節は文学研究の発展段階を簡単に振り返ってから、イタリアの記号論学者・哲学者で小説家であるウンベルト・エーコの〈開かれた作品〉理論から始め、「開かれた」テクストの理論をまとめていきたい。

文学研究は三つの段階に分けることができる。第一の段階は作者を中心にする時代であり、第二の段階は作品の時代であると言われている。そして第三の段階は、読者を重要視する読者の時代である。そのような遷移過程を踏まえながら、エーコの著作『開かれた作品』から〈開かれた作品〉に関する理論をピックアップする。

〈開かれた作品〉という概念は現代芸術論から文学作品の解釈に至る幅広い分野での適用性が評価され、文学研究においても積極的に意義づけられている。現代芸術の生命力や可能性を切り拓いたこの理論は、芸術作品は基本的に曖昧化された情報や豊かな意味合いを内包するという出発点からアプローチし、演奏者やオーディエンスを含む作品の受け手の能動的な関与によって多種多様な読みの可能性が開かれるという実態を提示する。エーコの論述によると、音楽や絵画などの芸術作品は基本的に曖昧性を含み、多様な読みを呼び起こす仕組みを持つ。それを文学作品に広げると、一つの作品は表では完結した形を持っていても、読者の積極的な関与に向けて解釈の可能性を孕む「開かれ」を持っている。作品の「開かれ」は、作品と読者との相互作用によって反映された一般性のある特性ではあるが、具体的には作品ごとに異なる現れ方をする。エーコは、文学作品の面では作品自体の価値や役割ばかりにフォーカスするのではなく、読者の役目を肯定するうえで、作品と読者とのコミュニケーション行為を認めている。作品は完全に作者の意志によって、定められた方法で既定の方向へ導かれる閉ざされた形態をしているのではなく、読者の介入によって、多種多様な形が賦与されたり、意味内容が逆転されたり、豊富な解釈の可能性を与えられたりするものと見なすべきである。エーコによって論じられた幾つかの事例に照らし合わせた結果として、村上作品は〈開かれた作品〉ではなくても、本質的に「開かれ」を持ち、比喩や曖昧な結末などの多様な表現方法によって「開かれた」構造を目立たせている。

第二節　「曖昧さ」を表す日本語の表現力

本節では、日本文学の顕著な特徴の一つである「曖昧さ」の形成に日本語が担わされている

役割を考察したうえで、日本語、とりわけ表記における特徴を紹介する。

日本文学の「曖昧さ」を論じるにあたり、日本古典文学から和歌の例を取り上げ、掛詞の使用によって、直接的ではなく婉曲的に、一義的ではなく二重の意味を同時に表出することを可能にさせる。実は、掛詞は一対一の対応関係だけでなく二つ以上の意味が掛けられていることもある。そしてよく知られている川端康成の長編小説『雪国』の冒頭文は主語の不在による多様な読みが可能となる。そのような日本語表現の特徴は原文と冒頭文の英訳との比較により、格段と際立っている。日本文学の曖昧さを作り出すには日本語が欠かせないのである。それはさらに日本語の表記体系に密接に関わる。ローマ字もアラビア数字も使うが、具体的に言えば、現代日本語は主として表意文字の漢字、表音文字の平仮名とカタカナという文字体系を使用する「二元的言語」である。表記体系及び「漢字、平仮名、カタカナを併用した漢字仮名交じり文」という基本的な表記規則のため、多様な表現ができるわけである。日本語表記には基本的なルールは存在するが、異なる表記方法をすることが許容されている。作者の意志に応じて、ある言葉、またはイントネーションを強調しようとする場合では、普段漢字もしくは平仮名で表記する言葉を意図的にカタカナ表記に置き換えても誤謬にならない。漢字と仮名、または平仮名とカタカナの変換可能という柔軟かつ機敏な特徴が日本語で仕上げられている文学作品の個性を浮き立たせることに大きく寄与している。

以上の特徴を持つ日本語で作品を書く村上は読者を具体的に想定せず、読者と同じ視線で物を書くという信条を抱いている。村上の理解においては小説とは参加しようと思ったら誰でも参加できる、出入りの自由度が高い運動中の世界である。そのような作品世界を構築するには、作品ごとに自由さや生命力を注入しなくてはならない。村上はどのようにその信条を忠実に守りながら、創作過程において作品を執筆するのか。その信条はいかに作品に溶け込むのか、作品の「開かれた」構造はどのような具体像を呈するのか、引き続き追究していきたい。

第三節　村上春樹の文体について

本節は文体の定義の中から幾つかを選び出し、紹介してから、村上作品の文体に対する評価、及び村上の文体の捉え方をまとめる。

数多くの定義の一つである中村明による「文章の表現上の性格を他と対比的にとらえた特殊性。文体を類型面でとらえるか個性面でとらえるかによって大きく二分され、現実に次のように多様な意味で用いられている」ものである。つまり文体は多くの側面を含む概念となる。なかでも文字表記が重要な役割を果たしている。

文体の定義を踏まえながら、村上自身の創作談からみると、村上作品の文体に関する評価は多数あるが、なかでも「表現の簡単さ」「英語的」「翻訳文体」などが多い。周知のように村上は欧米文学、特にアメリカ文学から多大な影響を受けており、文学作品の創作に取り組む傍ら文学作品の翻訳にも携わっているが、日本生まれ日本育ちの作家として主に日本語で執筆活動を続けている。村上自身の日本的な物を描くという念願は外部からの評価と一致しているのかなどの疑問が生まれてくる。その疑問を解くには外部からの見方以外にも、村上自身の文体意識及び村上作品の具体例を順次見ていく必要がある。

複数のインタビューや対談において、村上は文体について、作家にとってこの上なく重要な意味をもつと繰り返し唱えている。現在に至るまでのプロ作家としての生涯を振り返ったところで、村上が常に文体に気を配ることがわかる。確かに村上が英語で書いた小説を日本語に訳

したという試みがあった。しかし、村上自身は異質感のある描き方でも日本語で日本的なものを書く希望を持っている。村上作品の文体については、英語的でアメリカ文学から大きな影響を受けているという評価が多いようであるが、必ずそうとは言えない。日本的なものを書く目標を達成するために文体を文章の最も重要な要素であるとみなしている村上は多様性や柔軟性に富む日本語で創作活動に励んでいる。そのような姿勢が村上の重要視する作品の文体のあらゆる側面に現れている。文体はもちろん意味内容が豊かであるが、なかでも非常に重要な一つとして表記が挙げられる。

第四節　日本語の表現力を生かした村上春樹作品

本節は「登場人物の名前」「小説の表題」「動詞、形容動詞、名詞」というそれぞれの側面において村上作品から幾つかの具体例を選び出し、表記の特徴を考察する。

漢字や仮名表記の使い分けに対して、村上は語彙の意味だけでなく、異なる表記文字のもたらす違う視覚的、聴覚的なイメージにもこだわり、それぞれのイメージを具体的な内容表現に重ね合わせている。かな文字は基本的に語彙の音声を示し、意味合いとの関連性が漢字より薄いので、読みの多様性を促す。登場人物の名前において、意図的に漢字の代わりにかな文字を使ったり、またわざと漢字表記を強調したりするという、仮名表記と漢字表記の使い分けにより、一つ一つの名前は単なる呼称から登場人物の性格、人生における浮き沈みをほのめかせたり、対蹠的な意味合いで人生の軌跡を暗示したりする役割を担うようになった。漢字で表記する傾向が高い語彙を意図的に柔らかく流れるようなイメージを生む平仮名で表記するのは、日本語表記の豊かさを生かし、視覚における美的感性を向上させる技法である。そのほかに、村上は同じ意味を表す際に、異なる発音を持つ語彙の互いの響きの重ね合わせでリズム感を作り出し文学表現の多様性を高めようとしている。小説の表題及び日本語の形容動詞、動詞、名詞などに対して、仮名表記の使用は漢字の意味合いへの直接的な通路を断ち切るため、意味選択を可能にさせている。複数の意味生成が解釈の自由度をあげることは言うまでもなく、読者の想像力を膨らませ、結果的に読みの多様性にも繋がる。これは明らかに村上の読者の能動性を重要視し尊重するスタンスと一致する。

第三章　感覚の世界としての村上春樹文学

本章では、表現の面において村上作品の感覚の世界に視線を移すことにする。西洋と日本の身体論を踏まえたうえで、感覚それぞれの特徴に合わせながら実例を取り上げ、人間に生まれつき備わる五感のほか、感覚の合流としての季節感を含む様々な感覚を喚起する村上作品の表現技法を分析する。

第一節　身体論

本節では西洋及び日本の代表的な身体論を幾つか提示する。

西洋のデカルト、ポンティの身体に関する論述、及び日本の和辻哲郎、西田幾多郎、市川浩による身体論を取り上げ、身体の機能や感覚の理論をまとめた。身体を一種の機械として捉えているデカルトの心身二元論、ポンティの身体及び感覚に関する論述などを紹介した。一方、日本では心身一元論を主張する傾向が見られる。和辻哲郎の身体と自然の不可分な関係という主張、西田幾多郎による身体の心身の一体性、「行為的直観」、市川浩の身体の複数の分類と

心身の統合などの諸説が確立されている。心身の統合を唱えている心身一元論であれ、心身の独立性を強調する心身二元論であれ、いずれも身体をもって世界を感知するメカニズムにおける身体の重要性を認めている。われわれは感覚器官を介して外部世界からさまざまな刺激を受け取るとはいえ、刺激そのままを丸ごとに受け止め情報を獲得するわけではなく、そこでは自分なりの処理、統合、再作用が行われている。人間は世界から刺激を受けると同時に、個人的に世界に刺激を加えている。そして身体の変貌しつつある状態に伴い、感覚も絶えず変化の中にある。

第二節　身体感としての「書く」行為

本節では、文体を大切にしている村上は「書く」行為をどのように捉えているのか、また身体という要素を「書く」行為にどのように浸透させているのかについて考察する。

村上は作家として活躍する傍ら、ランニングを習慣にして継続し、フルマラソンに出場したこともある。ランニングの経歴や、走る理由をめぐる村上のインタビューや対談が、創作過程において肉体が想像以上に重要な役目を担っているという村上の認識を表明している。村上の考えでは小説を書くというのは肉体に基づき、マインドを併用する行為である。自分の身体をもって作品の価値を評価する創作方法も、理想的な作品像に触れた体験談も、村上が身体及び身体と精神の呼応関係へ高い関心をもち身体的な感覚を重視していることを示唆している。「血肉のある言葉を求めて」いる村上は日常生活の中で身体にまつわる諸感覚を介して創作の素材を体得し、蓄積していくプロセスを繰り返す。身体感を呼び起こす文章を追求し続ける村上は頭だけに依存するのではなく、身体で得られた実在する感覚を通して創作に関する理解を深め、身体感としての「書く」行為を実践する。次節からは村上が造形した文学世界に浸透する「感覚」に注目し、具体的な描写に映しだされた特徴を明らかにする。

第三節　視覚に訴えかける比喩表現

本節では多彩な感覚描写のなかでも、常に直接的な強いインパクトを与える視覚に訴えかける描写を分析してみる。

直接的に視覚に訴える描写は文学創作において最も常用される描写であるため、言うまでもなく村上作品においても散見される。視覚の描写において比喩という修辞の使用は既視感や臨場感の作成にプラスに働きながらも、直截な描写と違って曖昧さを孕んでいるため、読者の知識や教養などに託し、異なる理解を生み出すことができる。そして視覚だけでなく、具体的な描写において触覚にも大きく依存している。さらに「無音」「静か」などの表現は視覚及び聴覚の重層的なイメージを形成している。比喩に対し、一見普段は関係性のないように見える物事を比喩の中で結びつけるという常軌を逸した構造が村上によく用いられる。そして目に見えない対象を可視的な物に喩え、ユニークな表現を介して聴覚の表現力を借り、視覚的、聴覚的なイメージを形成させる方法が使用されている。主に視覚に託す描写においても触覚を大きく生かして「体性感覚的な統合」「述語的統合」を達成させた努力を見逃すことができない。

視覚に訴える村上作品の描写の特徴は、比喩を媒介として読者の想像力を働かせながら、実体験のある場面を展開させ、読者との距離を短縮し、読者から共感及び想像力を求める傾向が強い。読者の目の役割を最大化させる一方、目だけでなく触覚、聴覚にもある程度繋げている様子が見られる。

第四節　聴覚を刺激するリズム

本節は引き続き、もう一つの重要な感覚の聴覚に焦点を合わせ、従来リズムを重要視する村上の聴覚に関する描き方を考察する。

聴覚に大きく依拠する音楽への強い愛着の表現というと、ジャズ喫茶を経営していた村上は、作品の中に大量の曲をごく自然に散りばめたうえで、登場人物に繋げ、物語の世界に染み込ませている。作品の世界に登場する多くの主人公は読書や音楽を趣味とし、日常生活の中で常に音楽を鑑賞する習慣を身に付けている。また音楽好きというばかりではなく、音楽知識が豊富で、音楽を深く楽しむ能力を備えている。村上の考えでは聴覚を介して作品の世界への接近さらには溶け込みを促すことができるかどうかは、作品が作り出したボイスがどの程度読者のボイスと響き合うかに大きく関連する。「村上春樹『僕が小説を書くコツは、音楽と同じ』3 つの『共通点』を語る」と題する記事によると、村上は、魅力的な音楽を演奏するように小説を書くという創作信条を示したうえで、音楽が小説創作にいかに重要な役割を果たすのかについて述べている。小説を作成するにはリズムが必要であること、ハーモニー、そしてインプロヴィゼーション（即興性）という三要素が欠かせないというものである。

作品のリズムを作るために、村上は音声の繰り返しとオノマトペの効果を活用している。繰り返し、つまり反復による強調の役割、一種の整合性はもちろん、作者と読者の相互作用を促す役割もある。それは作品、簡単に言えば文章がどれほど受け手に既視感や臨場感をもたらすのか、いかに読者に感情移入させているのかに貢献するものである。繰り返しの機能は雰囲気作りをする以外に、読者に没入感の高い読書体験を提供し、さらにそのムードのなかで読者の想像力や思考力を掻き立て、言葉と読者との相互影響を強める。

音声に基づいたオノマトペ自体は感覚に伴い、ある音声が文化的要素に結び付き、ある特定の印象、共感、及びそれ以上の感覚を喚起する。共通のイメージを伝えられる一方、オノマトペは多義性を持つ語群でもある。村上はまた、日常生活の中で常用されている、または短編小説「TV ピープル」（初出：1989、『par AVION』1989 年 6 月号）、短編小説『かえるくん、東京を救う』（初出：1999、『新潮』12 月号）において自分なりに創出したオノマトペを作品の中に導入し、音声の異質感を引き立て、筋の展開を進めながら、小説の世界の現実性と非現実性の要素を交えることでリズムや音楽の役割を最大限に発揮させようとする意図が一目瞭然である。そしてオノマトペは音声的な特徴を顕著に持つと同時に、異なる感覚を統合する表現となり、豊かな意味伝達を可能にさせている。さらに、村上作品の文の区切りを看過することができない。村上作品では朗々と読む響きやリズムを作るため、冗長な文を二、三文で区切りを付けて仕上げる作成傾向が見てとれる。短い文でありながらも、似ている語尾が一気呵成にリズム感を整えている。

村上作品において描写は一種の感覚をメインにして展開させるパターンがあるが、実際のところ、感覚の一種類、二種類に限らず複数の感覚を一つの描写に織り成している箇所も多く見受けられる。

音楽的、または聴覚的な表現を多く用いることで人間が生まれつきもつ感覚という原点に立ち戻り、身体の機能を活動させている。村上は文字を道具にして様々な組み合わせの可能性を探り、リズムを作り出しながら作品を産出する。その創作活動にはリズムを通して自分の身体に染み込んでいる感覚を読者に共感させたり、思考を巡らせたりするうえ、あらゆる感銘を喚

起しようとする村上の意図が見られる。

第五節　味覚をそそる料理情報

本節では、村上作品における料理及び料理を用意する場面の細かい描写、つまり味覚にリンクする描写の分析を試みる。

村上作品に現れた食事や料理に関する描写に注目し、料理を再現する『村上レシピ』（2001、飛鳥新社）、また村上がエッセイでこだわりのおいしい食べ物を紹介する『村上レシピプレミアム』（2001、飛鳥新社）という書籍まで出版されたことがある。

『風の歌を聴け』の登場人物である鼠の好物がコカ・コーラをかけられたホット・ケーキであるという特徴が、鼠の性格を表出する道具となった。鼠の好物には濃いアメリカ的な雰囲気が漂い、さらに自由の味もすると指摘されている。こうして実は鼠がコカ・コーラの味にはまっているだけでなく、目には見えないものに束縛されているため、自由への欲望が高まっているという解釈にまで辿り着く。そのような食べ物と飲み物の一体化が料理に手間をかけないことを意味する。その点から見ると、鼠は食事に興味を持つ人であるとは考えられない。富裕層の家庭に生まれたにもかかわらず富裕層に嫌悪感を示すという設定、鼠が家族のことにあまり言及しない設定も疎遠な家族関係を暗示している。そして気分転換に効果があるコカ・コーラは家族や友達と疎遠な関係を持つ鼠の孤独感、虚無感や無気力感などのネガティブな情緒にかかわる。

料理や食事などを描写するに際して村上は手間を惜しまず、たとえ緊張の糸が張り詰めた筋の中においても、一見物語の展開に無関係のように見える主人公の食事をめぐる事情を、淡泊な筆致で報告するように記している。普通はそのような高い緊張感のなかでは、のんびりと料理を学んだり、作ったりする気分にはならないはずである。しかし並の人間と異なる主人公の個性がその書き方によって浮き彫りにされる。怪しげな雰囲気の中、料理のシーンが出てくるたびに和やかさが取り戻されたような現実味を味わえる。非現実的な展開を表現するなか、現実味のある要素の混入で非現実と現実の境を曖昧にさせることが村上の意図であると考えても一理あるだろう。『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』（1985、新潮社）の料理に関する描写からは主人公の「私」の日常生活に執着する人間味の一側面が見えてくる。その設定は鼠の食べ物への鈍感さとは対照的である。『ノルウェイの森』（1987、講談社）では食事を重要視したり、手料理に情熱をこめたり、積極的に他人と食事を行ったりすること、緑にまつわる諸設定において食が一種のメタファーになる。周りに愛されていない緑が愛情を強く期待することのメタファーである。

第六節　感覚の合流の季節感

本節においては、諸感覚の合流としての季節感に着眼し、人間に生まれつき備わる五感のほか、季節感を含む様々な身体に染み込む感覚を喚起する村上作品の表現技法を分析する。

作品の情景描写には四季の痕跡が多く織り込まれている。ここでは、村上作品に頻出する雨に関する描写に主眼を置きたい。1992 年に講談社から出版された『国境の南、太陽の西』においては、夥しい数の雨の描写が挿入されている。妻との初対面も突然の激しい雨が降り出した日であり、二人は雨宿りのために出会い、互いに一目惚れをする。もう一人の女性登場人物の島本さんの出現はいつも雨の日である。雨のたびたびの出現は島本さんという人物の神秘的な

雰囲気を引き立たせていると同時に、主人公の気分を仄めかせることができる。

2017 年の『騎士団長殺し』においても雨の描写が繰り返し登場する。雨をめぐる巨細な描写もあれば、一言一句で簡単に雨に触れている箇所もある。季節感を演出する一現象である雨の描写に収斂された所々の文として鮮明な印象を読者に残し、美的な感受を惹起する。小説の隅々まで浸透する雨の描写が物語の進展につれ、季節の移り変わりを連続的に表出している。比喩や擬人などの手法を使い、それぞれの象徴的な意味を持つ雨を丹念に描写することを通して季節ならではの光景を思い浮かべ、登場人物の心の動きを露わにする。そのような様々な感覚及び季節感の描写は市川浩による「同調」に被るところがある。

村上文学の感覚の世界において修飾語を重ねる緻密な描写があれば、簡潔な表現で細部の空白を残す描写もある。その細部の充実はテクストと読者の呼応によって達成されることが望まれる。そして、作品の情景描写は周辺の環境状況の輪郭をなぞり、全体的な雰囲気に溶け込んでいるうえ、登場人物の瞬時的な気分を映し出しながら、物語の展開に合わせて物事の動静を引き立てる役割を担わされている。

第四章　『ノルウェイの森』のエロティシズム

本章は内容の次元として『ノルウェイの森』のエロティシズムを検討する。エロティシズムの理論を基に、美的感覚を補助にし、生と死、セックスを書き尽くす『ノルウェイの森』の性的描写の実例を考察対象にする。ストーリーの展開を読み合わせながら、具体的な性的描写からエロティシズムを見出せる可能性、また文脈の中で性的描写自体の表現方法に浮かび上がってくる特徴を含め、エロティシズム論の諸要素との関係性に至るまでを分析する。

第一節　バタイユのエロティシズムをめぐって

本節は、エロティシズム論の代表的な研究者であるジョルジュ・バタイユ（Georges Albert Maurice Victor Bataille、1897-1962）及びその理論を確認し、村上との接点、関わりがあった可能性をインタビューや対談、作品におけるバタイユへの言及などから明らかにする。

エロティシズムの定義を全面的に説明することは難しい。バタイユはエロティシズムを死に密接に結びつけてから、動物の性行為と差異づけて論述を展開している。エロティックな性活動は、人間ならではの生殖とは無関係の心理的な探求であるゆえ、独自性を持つ。エロティシズムと死の関連性について、バタイユは不可分な関係にあるという主張を繰り返している。禁止があるからこそ、侵犯に伴う不安を感じることにより、エロティシズムが成り立つとしている。エロティシズムは暴力に接しており、欲望と恐怖、快楽と不安を結び付ける感受性に支えられている。禁止を破ることの不安感や恐怖感がそういった感受性に訴えることによって、性活動から感じ取れるエロティックな快楽が拡大すると言える。

村上のインタビューや作品から見ると、村上がバタイユについて語ったことはそれほど多くはないものの、作品世界において主にバタイユの名を文学を愛読する若者のキャラクター作り及び雰囲気作りの一種のシンボルとして扱っていることがわかる。

第二節　『ノルウェイの森』の解釈と評価

本節では、『ノルウェイの森』のあらすじ及び作品に対する評価を振り返ったうえで、「期待の地平」理論に基づき、小説の表紙の象徴的な意味を分析する。

『ノルウェイの森』は、村上の 5 作目の長編小説であり、1987 年に上下二冊で刊行され、2009 年に累計発行部数 1000 万部を超えた。作品は 30 カ国語以上に翻訳され、広く受容されている。

小説は三十七歳の「僕」である「ワタナベ・トオル」が、空港でビートルズの楽曲である「ノルウェイの森」を聴いているうちに、友達や恋人にまつわる青春の記憶が次々とフラッシュバックし、混乱状態に陥ることを描く。高校三年生の時、親友のキズキの自殺で「僕」は彼の恋人である直子と共に悲しみの淵に沈む。高校卒業後、「僕」は実家から離れて東京の学生寮に入り、他人と距離をとりながら日々を送っている。「僕」は、同じ授業を履修している小林緑や、直子のルームメイトの石田レイコと次から次へと出会う。小説の終盤で、直子が自殺を遂げる。葬儀後、「僕」は誰にも言わずに行く当てのない旅に出る。旅を終えた「僕」は東京で療養所を出たレイコと再会し、レイコを見送った後、緑に自分の気持ちを率直に打ち明けようと思い、彼女に電話をかける。

作品に対する村上自身の語り及び研究者の評価によると、小説は恋愛小説というカテゴリーをはるかに逸脱する「リアリズム小説」「成長」や「死」と「生」という要素が際立っている。そして多くの評価は青春、愛、性など諸要素を重ね合わせ織り交ぜて描かれる『ノルウェイの森』における性表現の重要性も示唆している。さらに独特な描き方が奇抜な性愛描写の可能性を提示している。それらの評価から、作品における登場人物の定めや物語の進行は「性」を避けては通れないことがわかる。

また最も表面的なレベルでは読者の期待の地平を築く、または打ち砕く機能を持つ『ノルウェイの森』の表紙装丁から、日本語原作の装丁に用いられた赤と緑という色合いがクリスマスシーズンに呼応するように見えるだけでなく、鮮明なコントラストによる鮮烈な印象作りとしても働いている。「期待の地平」理論をまとめると、読者はある作品に接する前にすでに過去の読書体験、教育レベル及び好みなどの個人的な要素、また書籍の宣伝、表紙装丁及びキャッチコピーなどの要素から影響を受け、あらかじめ作品に一定の期待、先入見を抱く。読書過程において「期待の地平」が崩されたり、充填されたり、拡張されたりする。理想的なケースでは、作品が読者の「期待の地平」を少しずつ破壊していく。『ノルウェイの森』の表紙の赤は情熱、情欲、タブー、禁止を意味する一方、緑は落ち着き、治癒、調和などの意を表す。その色のイメージからタブーや禁止の侵犯にあるエロティシズムの本質の片鱗が窺える。一方で、表紙が伝えるクリスマスの温かいイメージは、実際には多くの死にかかわる要素を扱う物語内容とは対照的であるため、期待の地平を覆す効果を持つといえる。

第三節　エロティシズムの描出方法

本節は、エロティシズムの具体的な表現方法を「涙の流れ」「月のひかり」「死のさとり」「心の穴埋め」「「しわ」のシンボリズム」という五つの部分に分けて主人公の「僕」と直子、レイコ、高校時代のある女の子、初対面の女性、そして直子とキズキの繋がりについて考察を進める。

作中に織り込まれた数箇所の性的描写において、直接的にセックス・シーンを描くものもあれば、性行為ではなく周囲の情景描写を丹念に描き、官能的な雰囲気を醸し出す間接的な描き方もある。情景描写があるからこそ、読みの可能性を拡大する。若者の孤独感や喪失感で織り成される物語である『ノルウェイの森』は死と生という正反対のように見える境地をどのように捉えているのかを性的描写によっても掘り下げられている。主人公の「僕」が直子、高校時

代のある女の子、初対面の女性及び石田レイコとの間で行った性行為にはそれぞれ異なる意味象徴がこめられている。連続性を求め続けた直子との沈黙の中での性行為は涙の象徴的意味を提示するとともに、身体の同調、禁止、侵犯、死などのキーワードに結び付けている。性行為ではないものの、雅やかな雰囲気の中で直子の媚態を表出する月の夜の場面は日本の美意識を輝かせ、間接的に性的なイメージを形成させる。直子の隠すべき肉体を裸にして相手に見せるという行為は禁止に対する侵犯である。さらに直子の美しい肉体が記憶装置の役目を担わされていることが明らかである。直子は恋人のキズキと挿入性交に失敗したが、互いに支え合い、様々な物事を共有する緊密な関係や愛情を築いている。それは肉体のエロティシズムから離れられる心情のエロティシズムと同じ性質を持つ。「僕」が一時的な温もりを得るために持った高校時代のある女の子及び初対面の女性とのそれぞれの肉体関係は心のコミュニケーションに基づいたものではないため、エロティシズムと大きく異なり、愛情を伴わない性行為の限界性を示している。作品の終盤で描かれた、自殺した直子のために儀式のように行われた十歳以上年上の女性であるレイコとの激しい性行為においては、最も存在感を放つのはレイコの身体表象であるしわにほかならない。しわは村上の身体を重要視する観念を示している。多くの性行為は程度によって異なるが、治癒の役割を担わされている。全体的に精神と身体の相互作用を認めている一方、身体の独立性を重要視する身体観が作品における複数の性的描写によって示されている。周囲の深いかかわりを持つ人々の死を経験した「僕」は自己喪失の状態の中、死の疑似体験も経て死を考え続けている。作中において性は死と生にまつわる思考にリンクして描かれているため、ほどよく恐怖及び死への不可分な関係性を露わにしている。

第五章　『騎士団長殺し』のセクシュアリティ

本章では、前章のエロティシズムの検討に次いで、引き続き『騎士団長殺し』の性的描写に焦点を置く。具体的な例文の分析を試みることにより、性的描写が作品を特徴づけるうえで重要な要素であることを示し、さらに性的描写が担わされた役割、美的特徴を明らかにする。

第一節　内外における作品の評価と受容

本節では、『騎士団長殺し』を紹介するうえで作品の代表的な評価を異なる側面に分けてまとめる。

2017 年 2 月に発行された『騎士団長殺し』は長編として内容が充実し、第 1 部『顕れるイデア編』と第 2 部『遷ろうメタファー編』に分かれたうえで、全部で 64 章から構成され、各章に章題が設けられている。小説は「私」という一人称の視点から展開される。美大を卒業し、肖像画家を生業とする三十六歳の「私」は、妻から一緒には暮らせないと離婚話を言い渡された後、感情整理のため自宅を離れ、一か月半にわたる放浪生活を送る。美大時代の友人である雨田政彦の紹介により、神奈川県小田原市郊外に位置するアトリエに仮住まいすることになる。そのアトリエはかつて日本画家として名を馳せ、現在は認知症で養護施設に入院している政彦の父親雨田具彦の所有する屋敷である。「私」はアトリエがある谷の向こう側の大邸宅に住む資産家の免色渉をはじめ、様々な人間と付き合い始め、受動的に誰かの罠にかかったり、積極的に好奇心を駆使して未知の物事を探究したりして、一連の不思議な出来事に巻き込まれていく。

先行研究からみると、日本では作品のモチーフに関する研究に並んで、多種多様なメタファ

一、そして村上が愛用する一人称の「僕」でなく「私」を使ったという視点の深層的意義などについて繰り返し取り上げられている。中国大陸では戦争観、歴史観、社会的問題の描き方をめぐる研究が圧倒的に多い。

第二節　性的描写が担う役割と機能

以上の作品及び様々な評価を踏まえながら、本節では『騎士団長殺し』の性的描写を「「私」と人妻」「初対面の女性」「免色と元恋人」「妻と「私」」「夢か現か」「穴と性器」「ホモセクシュアリティ」という異なる交際のパターンに分けて考察を展開する。

『騎士団長殺し』の中の数箇所の性的描写は独特な色合いを帯びるだけでなく、物語の進行にも積極的に機能する。作品の全体から見ると、性的描写が現実世界から異世界への往復、婚姻の破局から夫婦復縁に至るまでの過程においてエロティシズムにかかわる死、禁止及び侵犯、暴力などの要素との葛藤が続いている。また表現方法の面においては、性行為をそのまま再現する場合もあれば、婉曲的な描き方を採用し、セックスを交わす過程と同時進行で降り出した雨や鳥の囀りなどの情景描写を介して、肉感的、煽情的な雰囲気を醸成する場合もある。直接的な性行為の描写は性器や互いの動作を描くほか、比喩表現を併用することで伝達効果を高めており、一層生き生きとその場の風景を再現している。そして比喩に伴う表現上の曖昧さは余白を残し、解釈における多様性のベースを作っている。

具体的に言えば、「私」と人妻、また初対面の女性との性行為は連続性への憧れや痛みなどの要素に結び付けられているが、愛情を伴わないため、エロティシズムの枠組みから離れている。複数の綿密な性描写の中では、免色と元恋人の性行為はバタイユによるエロティシズム論から逸脱し、村上作品のそれまでの作風と違い、物語を展開させる子作りという目的に関係する。それらと異なり、「私」と妻の性行為は妻に対する強い愛情や独占欲を表している。

ほかにも幻想空間を巧みに描いた怪談話の雰囲気を彷彿とさせる設定、夢か現かの非現実的な世界と現実世界の間を行き来するように私の夢の中で行われた性行為が挙げられる。それは主人公の「私」の内的暴力や闇を暗示する一方、性夢による受胎という設定が、その後の娘の誕生による父作りという設定に結ばれ、妻との復縁を促している。夢の中の性交という設定は因果論と反対に、「意味のある偶然の一致」を意味するシンクロニシティを思い起こさせる、間接的に「私」の当時の本当の心境、いわゆる妻や家庭生活への愛情や未練を表出している。メタファーとして女性の性器に例えられた奇妙な穴が、現実世界から死後の世界へと導く入口としての役目を負っている。死後の世界への通路である穴が女性の性器に似通うのであれば、女性の性器を通過する行動を伴う性行為は死後の世界に踏み出すという模索と同性質である。その比喩は性交が疑似死亡の体験としての性質を有するというヒントを与えている。穴を性器に例えた描写から肛門への連想の延長線上に正体不明の人物である免色に取付く数々の謎が物語の推進役を担わされていると同時に、ホモセクシュアリティという曖昧な疑いを浮上させる。しかし、確定性のある答えを開示せず、さりげなく曖昧性のある情報を露呈するという技法は作品の性的描写に異彩を添えている。その類の性的描写は単に表現上の美的な感覚を感じさせる働きだけでなく、物語上において筋の展開や人物造形に情報を補足したり、暗示したり、さらに思考回路を広げたりする多重的な役割を全うする。要するに、作中に多様な比喩を取り入れる性的描写は官能的な効果をもたらすと同時に美的感受性を生み出し、小説を構成する必要な一要素として登場人物の結末や物語の進行にポジティブな影響を与えている。

終章

終章では本論文による村上作品に関する考察を全体的に整理し、総括した。世界的に読まれている村上作品が読者の多様な解読を呼び起こしている現状を踏まえつつ、中国大陸や台湾における受容事情の紹介により、村上がすでに一種の文化的象徴となり、読者の日常生活に影響を与えていることを確認できたうえで、その「開かれた」構造の具体像の一部を闡明してみた。読者論、文体論、身体論やエロティシズム論をベースにして村上の読者の活発な参加に注ぎ続ける熱い目線、作品が身体に染みることを目指す信条、感覚に訴えかける技法及び作品の性的描写からエロティシズムを見出す可能性を確認できた。欧米文学から薫陶を受けている村上は、終始日本人としてのアイデンティティを意識しながら日本語を使用し、創作活動に臨んでいる。作品世界を構築するなかで、日本語の表記体系の柔軟性及び曖昧さという特徴を生かし、漢字や仮名の使い分けを通して多様な読みを孕む土壌を用意しておく。村上は、創作活動において身体の役割を重んじる信条を抱きながら、日本の美意識から影響を受けており、異なる表現技法を駆使し、人間のあらゆる感覚に訴えかけようとする態勢を整えている。そこに欧米文化から多大な影響を受けていても日本的なものを書こうとする村上の強い念願が一貫して存在する。性的描写に対して、単なる性行為そのものを描くのではなく、入念な情景描写によりエロティシズムに繋げたり、エロティシズムから離れさせたりする一方、人物の内面の変化を露呈させることで、人物像を充実させるという異なる側面が見られる。このように「身体」という大まかな枠組みの下で、表記、表現、内容という異なる次元から行われた考察が村上作品の多様な読みを孕む「開かれた」構造の解明及び村上の文学世界の再認識を促すことに繋がると考えられる。